

「荻窪家族レジデンス」が目指したのは、理想の高齢者居住です。建主や賛同者とともに何度もディスカッションやワークショップを繰り返しながら、「地域開放型シェアハウスの賃貸集合住宅」として2015年3月に竣工しました。建主の瑠璃川さんは親の介護経験の中で、理想の施設が既存の施設にはないという思いがありました。老年社会学を専門とする澤岡詩野氏など専門家と相談する中で、設計の声がかかりました。今までにないビルディングタイプ的设计であり、コンセプトや想いを具体的な形にするために「参加のデザイン」が有効であると考えました。

「荻窪家族レジデンス」ができるまで

■設計段階:①建主にコラージュをつくってもらい建主の想いや嗜好を理解しました。②賛同者とのワークショップを通しコンセプトを明確にしました。③タイルの絵付けワークショップを行い賛同者を増やしました。こうした中で、「地域に開こう」「多世代居住」というコンセプトが共有されました。これらをもとに、全体を3階建てとし、地域開放部分として1階に集会室・ラウンジ・アトリエを設け、居住者用の共用部分として2階にもラウンジを設けました。各住戸は25㎡とし多様なテナントに応えるべく、すべて異なるプランとしました。各住戸にはシャワーがあり、3階に共有の浴室を設けることで居住者間に出会いの機会が生まれました。

■建設段階:④共有部分をより使いやすくすべく、若手建築家・ツバメアーキテクトが参加し、事前リノベーションワークショップを実施しました。これは完工前に、共用部分の使い方をワークショップで

『荻窪家族プロジェクト物語』
—住む人・使う人・地域の人みんなできつり
多世代で暮らす新たな住まい方の提案』

荻窪家族プロジェクト | 瑠璃川正子(代表)、澤岡詩野、連健夫ほか 編著
2016年5月、萬書房、224頁、本体価格1,800円

多世代が共住し、かつ、住宅内でコミュニティが完結するのではなく、地域の一部として交じり合う住まい方。そんな住まい方のできる住宅を、行政や公的支援に頼らず、自らの手でつくってしまおうという取り組み「荻窪家族プロジェクト」を紹介したのが本書である。本では、プロジェクト代表の瑠璃川正子氏、大御所・若手建築家、介護のカリスマ、老年社会学者など、これまでの歩みにかかわった人々それぞれが自らの視点から、この住宅がつくり上げられるプロセスを丁寧に紹介している。設計、都市計画、不動産、まちづくりの専門家にとって、超高齢社会における新たな住まい方のみならず地域コミュニティの在り方を考えるヒントの詰まったテキストだ。



読者の視点 1
理想の高齢者居住とは？
「荻窪家族レジデンス」の取り組み

連健夫
むじけたけ
連健夫建築研究室



「荻窪家族レジデンス」の外観

シミュレーションすることにより、すでに設計された内容を、より使いやすいようにリノベーションすることです。それ以外に、⑤タイル並べワークショップ、⑥塗装ワークショップ、⑦ウッドデッキづくりワークショップを実施しました。これらにより、厚みのあるデザインになるとともに、参加者に皆でつくったという意識が生まれました。

■使われ方:集会室では、保健相談室や子育て支援室が運営されています。これらは行政がやるべき内容とも考えられますが、私的建物で公的な活動を行う意味として、柔軟な対応ができる良さがあります。またラウンジでは百人力サロンとして、「チョコっと塾」や「フラットお茶会」、「百人力食堂」などの活動が行われています。2階のラウンジ



チョコっと塾(講師を招いて1~2カ月に1度行われる勉強会)
デンマーク留学から帰国した学生によるレクチャー



居住者ラウンジ

ではクリスマス会、普段は居住者間で一緒に食事する状況も生まれています。

このプロジェクトの意味を読み解くために、いくつかのキーワードがあげられます。すなわち「新しい高齢者居住、多世代、シェア、地域開放、参加のデザイン、ワークショップ、事前リノベーション、現在進行形、余白のあるデザイン、第三の居場所、私に公を入れる、自助から生まれる共助、インフォーマル」です。月に1回見学会を開催しています。お時間のある方はぜひ、ご来訪いただければと思っています。